

釣れ釣れなるままに

2011年思い出の釣行記 PART. 1

魚もどろり波も翻り

鹿島釣狂



良瑠石での釣果

総会

1月に22年大会の顕彰と23年度役員選出をメインとした釣遊会総会が開催された。年間総合優勝旗を手にしたのは嵐氏で私と前野氏が準優勝を分け合った。年間大物賞の主なものを拾ってみるとアブラコ51.1cmを吉井 博、アカハラ52.6cmを仲俣釣狂、クロガシラ44.0cm、カンカイ36cmを谷口良幸、ホッケ46.1cmを大前健治が獲得し、不思議なことにカジカは45cmを超えるものは出なかった。

そして、役員の中の事務局長に私が仰せつけられた。前事務局長の大前氏は平成4年から通算で19年という長きにわたって大役を引き受けてきた。陰ながら献身的な働きを見てきて頭が下がる思いであった。大前事務局長の後を継ぐとなると荷が重いが今までお世話になってきた手前断るわけにもいくまい。精一杯務めようと思う。

まずは役員会を開いて今年の開催日程と開催場所を決定した。第1回大会は中歌港～鵜泊港となったが、瀬棚港から奥ではあまり開催した経験が無く、私の初仕事として下見に出かけてみることにした。

東日本大震災

3月12、13日の連休を4月、5月大会の下見を兼ねた釣行を計画し、下見とも思えないようなエサも用意した。天気予報もよく明日を楽しみにしながらも、職場の女性職員と打ち合わせをしていると、頭がクラッときた。「地震でないか！」と呟いてもその職員はキョトンとしている。すぐにグラグラッときた。「地震だ！」施設利用者が恐怖の叫び声を上げる。大声を出しながら図書室のテーブルの下に利用者たちを潜り込ませ、一旦揺れが収まった時点で外に誘導して避難させた。揺れがすっかり収まったので施設に入ってもらったが、一応警戒して外套を着せたまま施設の中で待機する。そして2度目の揺れ。揺れている間も一人一人を外に避難させる。そんなことを3度繰り返した。

テレビをつけると東北沖を震源とする大きな地震があり津波警報が出ている。釣行で見覚えのある浦河港の岸壁に波が上がってきた。函館駅裏の高規格道路下の十字路が映し出され、波がじわじわと路面を覆っていき、高いところから十字路に向かってきた車が立ち往生している。一方通行らしく元に戻れない様子で、続いてきたパトカーも行く手を阻まれた。

当日は同種の施設で組織された仲間の分散会があり、酒も手伝って軽い脳の揺れを感じながら自宅に戻ると、日本中がとひどい有様で午前3時までテレビに釘付けになる。朝は予定通り目が覚めたが、釣りに出かけられるような雰囲気がない。女房に「どうするの」と尋ねられて、「中止にする」とボソッと言った。息子に「こんな状況で出かけるなんてキチガイざただ。」とほざかれて、お前には言われたくないと思いながらもチョッピリ未練が残っているのも事実だ。

自然災害の恐ろしさ、そしてチェルノブイリやスリーマイルに並ぶ原発事故の恐怖などがTV番組を通して報じられていく。その一方で、震災直後の惨状の中でも被災した方々

が避難先で見せる所作には、日本人の特性、あるいは日本人の文化ともいえる底力を感じさせられる。突然の苦境や悲しみにも必死で耐える辛抱強さ、譲り合い助け合う態度、整然と並ぶ規律正しさなど、高いモラルで復旧・復興を願い前進していく姿に感銘させられる。無縁社会だの家族関係の希薄化、孤立化だのといわれてきた近年の日本人の姿だったが、礼節を重んじる日本人の心がクローズアップされて世界に伝わっていく。

自分はどうなのだろう。未だに未練がましく釣りに行きたいのだ。退職後の慰安にと3月20日～23日まで休暇をとって計画していた沖縄旅行も中止になった。そんな自粛ムードの中、その中止になった旅行のための休暇をも釣りに当てようという魂胆なのだ。

自粛ムードの中

☆釣行日 平成23年3月20、21日

☆入釣場所 良瑠石

☆釣果 カジカ 380 mm 300 mm

岩見沢釣遊会ではここ数年、瀬棚港より奥は釣り場範囲に入っていない。私が入会した頃の頃、ただ単に空撮写真が魅力的だったからと鷹ノ巣岬に入釣して、吹雪混じりの雪の中でカジカの35cmとホッケで1008点の10位入賞した記憶がある。この時は太櫓川河口に入った仲間が50cm台のアカハラで上位を独占した。4月21日のことである。この時期でもアカハラはいたのである。

今回の下見は過去に入釣したことのない瀬棚港より奥として設定した。一応、手前から瀬棚川尻砂取り場、鷹ノ巣トンネル裏、良瑠石川周辺、そしてメインを鵜泊漁港左とした。この鵜泊漁港の左の荒磯は風が条件の釣り場のようだ。貴社発行の超大物ポイントガイドを拝見するとソイ62、ハチガラ39などととてもない数字が並んでいる。ソイ類は5月からと決めているが何月に釣り上げたものだろう。空撮写真で見ると露頭岩や隠れ根が点在していてなかなか手強そうで一筋縄ではいかないだろう。根掛かり必至なので仕掛けに一工夫がいりそうだ。1本バリ仕掛けに捨て糸、棒鉛で対応したい。ゴロやオオナゴ、豆イカをエサにウキ釣りでも試してみたいものだ。立岩までのテトラ群の右でもアブラコが出ているので竿を出してみよう。やはり1本バリ捨て糸仕掛けで広範囲を探って底根の様子を確認しておこう。大物だけを狙ってここでじっくり一夜を過ごすのも良いだろう。震災前に用意したエサがある。生イソメは塩エビコをまぶして保存し、丁度良い具合になっている。釣り道具は、一応何でも対応できるように揃え持っていくことにした。

3月20日(日)午前10時に自宅を出発し、高速を利用して一路寿都に向かった。3時間後には寿都に到着し、中華料理店「昇園」でラーメンをすすりながら大会での昼食予約を確認する。これも事務局長としての初仕事なのだ。

鵜泊漁港は比較的小さな漁港で、まずは狙いとしていた立岩までのテトラで構成された外防波堤の左の磯に向かってみた。大岩群が行く手を阻む。大岩を上ったり下ったりしな

がら何とか現場にたどり着くと海況は真に素晴らしく、数々の大物記録にもうなづくことが出来た。しかし、今は手ぶらで明るい内だったので何とかだったが、大会となると暗い上に大荷物を担ぐことになり、残念だが諦めるほかない。あの大物記録を釣り上げた御仁はどんなタフガイなのだろう。



良瑠石から鵜泊漁港を望む

夕闇が迫ってきているので今日中に釣り場一カ所でもと良瑠石で竿を出してみることにした。するとサクラマスを狙った親子連れのルアーマンがやってきた。この時期に何を狙っているのかと尋ねられたので、大会の下見で竿を出してみたとだけ応えた。「何か釣れるといいですね」と応援してくれるがその眼差しは「どうせ釣れないのに」という言葉を飲み込んでいたようにも見えた。

午後6時に釣りを開始した。その2投目でカジカ30cmが出る。釣果は余り期待していなかったが魚がいることが分かると少し粘ってみる気になった。その後、2本目となるカジカ40cm弱が釣れたので9時半には撤収し、瀬棚港で車中泊をすることにした。瀬棚港ではテレビ電波が届かないため、万が一を考えてNHKラジオ放送を聞き、日本酒を飲みながらうたた寝をする。ラジオから地震速報が届き福島沖震度4と伝えているが揺れは感じなかった。津波警報は出ていない。

3月21日(月)5時に目が覚めて車から出てみた。白々と明けかかった港に立つと、向かい風が強く吹きつけ、白波も立っており釣りをする気になれない。岸壁でポツラポツラと竿を出している釣り人に聞いて回るがめぼしい釣果はなかった。カレイでもと鷹ノ巣岬に向かうことにした。

途中、瀬棚港と後志利別川の間にある「砂取り場」に立ち寄った。散歩の人が砂浜を黙々と歩いていたので挨拶を交わすと、5月の盛期なら釣り人も見かけることもあるが、この時期に釣りですかとたまげられてしまった。「砂取り場」は岸边よりすぐ深くなり、いかにも大物が潜みそうな海況である。150m程沖合に波除けのテトラ群が並び、大時化ではあるが磯は波が穏やかで釣りは出来そうである。浜辺に砂利が打ち上げられているところがあり、その前は隠れ根が点在しアブラコが出そうな雰囲気がある。30m程前にある平盤の手前はアカハラ魚道になっていると思われた。

先へと急ぐ。鷹ノ巣岬の平盤には波が上がっておりカレイ釣りは無理と、良瑠石川で竿を出した。橋の袂に駐車し、海底の様子を伺うためにまずは1本の竿で広範囲に様子を探ってみる。底荒れしており根掛かりがひどいが、近投したネット仕掛けは何とか抜けてくる。2時間ほど根掛かりを避けながらバクダンやゴロを粘り強く打ったが結局アタリさえ出なかった。

その後、今回は大会範囲に入っていない釣り場をあつちにふらふら、こつちにふらふらと巡ってみたが波が高くて釣りをさせてもらえそうな所はなく、今後のためにと写真に納めるだけで帰途についた。

下見の結果、次回大会の釣り場を瀬棚「砂取り場」に内定した。良瑠石は唯一竿を出して釣果もあったところだが、ここは歳をとっても下りられるところだ。自分は今後どんどん歳をとっていく。そのうちに道路からの近間しか釣り場に立てなくなるだろう。還暦を過ぎたが、まだまだ体力は保持できている今の内にしか行けないところをと考えると、途中立ち寄った「砂取り場」が魅力的に思えたのだ。

災難に見舞われた初仕事

岩見沢釣遊会第1回大会

- ☆開催日 平成23年4月24日
- ☆開催場所 中歌港～鶴泊港
- ☆入釣場所 良瑠石
- ☆釣果 無し

今回は釣遊会事務局長として初めて大会を運営することになる。しかし、家を出るときに、審査用の記録用紙を入れた紙袋を忘れそうになる。この紙袋には他にも大会運営に重要な役割を果たす品々が入っており、これを忘れると釣りはできても大会とはならないのである。大事なモノなので釣り道具とは離して置いていたのがまずかったらしい。コレとコレとコレという風に集合場所に向かう車の中で復唱したのが幸いした。

バスが出発し、新事務局長としての挨拶も無事すまして、1年の大会計画や審査規定の確認、各種運営事項を会員の皆さんに連絡し終わった。そして、紙コップを片手にお客さんとして乗って頂いた方々から差し入れられた酒を振る舞いながら個々に挨拶を交わす。その頃にはもう恒例である春の宵の酒宴が始まっていた。

途中、銭函で火事があったらしく高速が通行止めになったので国道5号線を走ることになった。消防車のサイレンがけたたましく鳴り響き、遠くに火の手が見えた。釣行の行く手を阻まれたようで不吉な予感が脳裏をかすめる。そして、どうしたことか朝里の信号機でバスがゴトン、ゴトンと大きく揺れて停まってしまった。路肩の縁石にタイヤをぶつけてしまったのだ。何事だろうと運転手に訳を聞くと

「高速に乗っているのにバスの速度が80km/hしか出ない。札幌インターチェンジを抜けてようやくエンジンが噴けてきたが、それでも100km/hを超えない。ブレーキの効きが悪いと感じていたが、この赤信号でとうとう効かなくなってしまった。赤信号で停まっていた前の車に危うく追突しそうになったので縁石に乗り上げてバスを停めたのだ。信号が青に変わり前の車がスタートしたので運良く追突することだけは免れた」というのだ。

とんでもない話だ。整備不良で危うく追突事故を起こすところだったのだ。スピードが出ていたのならどうなっていたのだろうか。たくさん命を預かって運転しているのだ。事務局長としての責任も出てくるだろう。どうしたもんだらう。引き返すにもこの体たらくでは命を預けるのは危険である。

運転手が会社と連絡をとり、小樽にある仲間内のバス会社から代車を用意して駆けつけてもらった。しかし、その観光バスの運転手も仕事が終わりに、晩酌のビールに口をつけていたというのである。それなら、どうしてここまで運転してきたのだろうか。全く持って危なっかしい。

小さな問題なら会長と常にコンタクトをとってその都度結論を出していたのだが、こればかりは役員会を急遽開いて相談をすることになった。このまま進むか、引き返すかという重い課題である。結論的には進むことになった。荷物を全て観光バスに移し替えて、ここまで運転してきた危うい運転手に命を任せただの。

飲むほどに

バスの中では暇を持て余したのかいつもの量より余計に飲んでしまった会員がでてきた。呂律はいつにも増して軽快に回るのだが足元がどうも危なっかしい。このままだとお歳を召されている方もおられるので一人で釣り場に立たせるにはチト心配になる。紙コップに残っていた酒を下げて、ジュースやコーヒーを注いで歩く。

古い話で恐縮だが草薙事件の事を覚えているだろうか。スマップの草薙 剛が午前3時頃に自宅近くの公園で裸になって大声を出し、公然わいせつ罪で警察に逮捕されるとニュースになった。たかが公然わいせつ罪で警察所に留置され、家宅捜索まで行われたと言うから凄まじい。大声を出して近所の高級住宅街から苦情が出たことや、警察が連行しよう

とした時に暴れたというから騒音罪や公務執行妨害罪ならまだ理解できる。しかし、公然わいせつ罪での被害者は誰もいないということだ。人気タレントや相撲界などのスポーツ界でも大麻騒動が世間を賑わせていたときだったから警察も念を入れたのだろうか。

それはそれで仕方のないところもあるが、あろうことか時の鳩山邦雄総務大臣がマスコミの取材に応じてしまった。草薨 剛が地デジのイメージキャラクターとしてポスターやテレビで宣伝していたことから、「最低の人間だ」「絶対許さない」と吠えた。しかし、そのコメントに対する予想外の反発で抗議が殺到したことから、次の日には早速、人が人を裁くことは出来ないとした上で「最低・最悪の行為だった」と言い直して謝罪した。鳩山邦雄といえば法務大臣時代に死刑執行のあり方で物議を醸し出していた政治家である。自分の発言を貫ければよいのだが信念がないから言葉にも一貫性がない。職場では早速、時の外務大臣の首脳会議での酩酊会見がやり玉に挙げられた。その時にこそ「最悪・最低の人間だ」とコメントすれば人気は上がったのにと揶揄する。

草薨 剛のことになると我が家でも黙ってられない人間がいる。彼女は当初、草薨 剛のこの事件を「公然わいせつ罪」と報道されたことから、殊勝にして話も控えめにしていた。私が「俺も酩酊しているんなことがあったが、裸にだけはなったことがない。しかし、酒のことだから仕方がないよな。」という言葉にも肯いてしおらしくしていた。しかし、総務大臣のコメントが出始めてから、鼻息が荒くなってきた。更に、草薨 剛の謝罪会見を聞いてからは、「やっぱりいい人だった。剛ちゃんはかわいそうだ」と弁護する。私から見ても「いい人」を演じてきた草薨 剛の会見は、やっぱり「いい人」だったのではないかと思えてくる。挙げ句にこのことが飛び火して「剛ちゃんのは可愛いもんだけれど、あんたの酒飲みはだらしが無い」と矛先をこっちに向けてくる始末である。

「酒は天の美祿（みろく）、酒を飲むには酩酊を成さしむるな莫（な）し」酒は天が与えてくれた素晴らしい贈り物である。しかし、酩酊してしまうような酒の飲み方は決してしてはならないという戒めである。日本人は比較的「酒には寛容だ」ということだが、酔った勢いで若い者に説教するのは、やはりやめておいた方が良さそうだ。その場は取り繕っているように見えるが、おそらく苦虫を噛みつぶして我慢していたりするのだろう。釣りを嗜みながら酒をも愛する方々にも思い当たる節が無いわけでもないだろう。私は当然、頭を垂れてしまう。自戒しよう。

丸坊主

初仕事は騒動だらけだったが何とか始点の中歌港に着いた。私の目的地は瀬棚「砂取り場」としていたのだが、少し酔いが回っていた御仁が心配で彼を見送ってからと、下見で竿を出した良瑠石に変更した。なんやかんやで良瑠石で竿を出した時には午前2時を回っていた。3月に下見した場所に竿を設置してドボンと仕掛けを振り込むが根掛かりにゴミが凄くアタリも皆無である。良瑠石川河口でやっていた吉井氏が「根掛かりでどうにもならない」と早々に引き上げてきて鵜泊漁港方向に向かっていった。そして、鵜泊漁

港方向に向かっていたはずの島氏、吉田氏が私の隣にやってきた。以前大漁した出岬が見つからないので、こちらにやってきたとのことだ。しばらくして島氏に聞くとカジカ1匹でどうにもならないという素振りだ。吉田氏も獲物がないと嘆いている。私もこの時点で遠投に1度だけアタリが出たのみで竿を曲げたのは根掛かりばかりだったのだ。移動を決意して鵜泊漁港に向かった。

薄明るくなりはじめた鵜泊漁港ではフライマン2名がサクラマスを狙って竿を振っていた。内外の防波堤にも釣り人が乗っている。吉井氏は、アカハラ2匹、カジカも小さいが2匹来たという。その隣では広島遊釣会の御仁がクロガシラやホッケを上げており、鵜泊漁港周辺にはその仲間が入っているという。

私も漁港の空いていたところで竿を出したが、漁港内は潮が透き通っていてアタリも皆無だ。さらにアカハラの1匹でもと何度か移動を繰り返したのだが・・・。



鵜泊漁港全景

審査結果

優勝	嵐 光博	1 1 1 2 点	(アカハラ464mm+アブラコ358mm+2900g)	瀬 棚 港
準優勝	前野達志	9 7 5 点	(アカハラ384mm+クロガシ343mm+2480g)	瀬 棚 港
3 位	島 強二	9 5 4 点	(カジカ 365mm+アブラコ327mm+2620g)	良 瑠 石
4 位	大前健治	8 4 7 点	(ホッケ 369mm+アブラコ310mm+1680g)	中 歌
5 位	吉井 博	8 2 6 点	(アカハラ350mm+カジカ 302mm+1740g)	鵜 泊
身長優勝	岡 英成	9 6 7 点	(ホッケ 390mm+アブラコ389mm+1880g)	中 歌

審査結果は、平成8年の大会で嵐氏・前野氏が優勝、準優勝した時の再来となった。二

人は誰も予想していなかった瀬棚港に入りアカハラ、アブラコ、クロガシラ等を大釣りしてきたのだ。またしても二人で優勝・準優勝を分け合うことになった。

身長優勝は岡氏である。狙いとしていた中歌平盤が高波のために入釣することが出来ず、やむを得ず中歌港右平盤に入った大前氏の隣で竿を出した。すると1投目からアブラコの大物が食いついてきたのである。身長をとったホッケは明け方に来たらしいが、その上をいく大物ホッケはどこかに紛れて見失ってしまったらしい。この平盤と中歌漁港の間にホッケ網が入っておりそれを避けながらの釣りだったということだ。私の方はというと結局、〇、〇、丸坊主に終わってしまった。頭を丸めて出直せということだろう。